

# 観 音 寺



昭和61年7月

第5号

年2回発行

編集発行

小出真行

自分の心は小さく見えるけれども

実は際限もなく広く亦大きいのである

(十住心論)

## 笑顔の五徳

「幸福は笑顔から  
健康は笑顔から  
平和は笑顔から  
修養は笑顔から  
交際は笑顔から」

笑った顔、悲しい顔、怒った顔、憂うつな顔、皆様は、どんな顔が好きですか。それは笑った顔に決っていますよね。この笑顔は人間にとって大切な宝なのです。笑顔でいますと身も心も豊かになり争いもなく仕事も友達の輪もうまくいくと思いませんか。皆様素敵な笑顔で、毎日毎日が過ごせるように精進していきたいものです。



般若心経(4)

是故空中無色 無受想行識

無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法

無眼界乃至無意識界

(是の故に、空の中には色も無く、  
受と想と行と識も無く、眼耳鼻舌

身意も無く、色声香味触法も無く、

眼界も無く、乃至、意識界も無し)

「是の故に空の中には」とは「実体がない  
という空の立場においては」との意味で、こ  
れは、空の立場から見ればということだ。  
「色も無く、受と想と行と識も無く」とは、  
例えば、人間が人間として存在するためには、  
肉体(色)と感覚(受)と、感覚した概念を  
構成するはたらき(想)と、この概念を記憶  
して意識をつくるはたらき(行)と、この意  
識や記憶を積み重ねてできる知識(識)の五  
つの要素から成り立っていますから、この五  
つの要素なしでは人間は存在しないのです。  
従って、どの一つを欠けることも出来ません。

「眼耳鼻舌身意も無く」とは、人間にはそ  
もそも、眼、耳、鼻、舌、身の五管がありま  
すが、仏教ではそれに思考する器官の「意」  
を加えて「六根」といいます。

「六根清浄、お山は晴天」とありますが、  
あの「六根」のことです。この「根」とは機  
関とか能力の意味です。この六根も土台の五  
つの要素が空ぜられるので、これまた「空」  
になるのです。

「色声香味触法も無く」とは、この六つの  
機能を「六境」といいます。「境」とは認識  
の対象となるものの意味で、六根の感覚作用  
で眼による「色境」、耳による「声境」、鼻  
による「香境」、舌による「味境」、身体に  
よる「触境」、意識による「法境」ですが、  
それもまた「空」じられるのです。

「眼界も無く乃至、意識界も無し」とは、  
つぎに六根が六境を認識する作用もまた六つ  
あり、それを「六識」といいますが、これは  
眼識(見)、耳識(聞)、鼻識(嗅)、舌識(味)、  
身識(触)、意識(知)です。心経には「眼界  
乃至意識界」と「界」の字を使っていますが、  
これを「認識の領域」と見たらいいのです。  
それが空じられるのですから、眼の領域から、  
意識の領域に至るまで、実体はことごとく  
ないのです。

要約しますと、実体がないという空の立場  
においては、物質現象もなく、感覚もなく、

表現もなく、意志もなく、知識もありません。  
それは眼もなく、耳もなく、鼻もなく、舌も  
なく、身体もなく、心もないのですから、か  
たちもなく、声もなく、香りもなく、味もな  
く、触れられる対象もなく、心の対象もない  
のです。ということは眼の領域から意識の領  
域に至るまでその実体(真の姿)はことごと  
くないということなのです。

「念珠のいわれ」



念珠のいわれは、まだ、お釈迦さまが靈鷲  
山に居られた時、難陀国の波瑠璃玉が、自分  
の国は小さく辺境の地で盗賊が絶えず出没し、  
疫病もはやり、人々は非常に苦しんでいる事  
を話し、「この苦しみから救われるよう、自  
分達も修行出来るお教を説いて下さい」とお  
願ひしたところ、お釈迦さまは、「木棧樹の  
実を百八個通して環をつくり、これを常に身  
体から離さず、心から仏さまの御名を唱え、  
一つずつ繰っていきなさい。それが二十万遍  
になった時、心身の乱れがなくなり、人々の  
心も自然と安らかになり、国家も安泰となり、  
さらに百万遍になったとき人間のもつ百八の  
煩惱も断ち切ることが出来ます。」と説かれ、  
一つの数珠を授けました。早速、波瑠璃玉は  
六親眷属全てに数珠を配り、仏法僧を念じた

ところその国は安泰し、人々が幸福になったことがお経に説いてあります。

この数珠ですが玉の数は、百八個、五十四個、二十一個、十八個等いろいろありまして、百八個が基本となっています。それは人間のもっている百八種の煩惱が信仰の力によって百八種の仏の徳に転化するためなのです。俗に親玉といわれております。母珠は阿弥陀如来の徳をあらわし、百八個を貫ぬく糸は観世音菩薩の徳をあらわし中間に小さい玉が四個ほどはさんであります。これは、法、利、因果という四菩薩になっています。母珠を境に左右に五十四個づつ玉があるのは、仏の道をあゆむ菩薩の段階が五十四位になっているので、一方の五十四は人間が生まれもっている本有の仏徳であり、もう一方の五十四は我々の修行の力によって現れる修生の仏徳であります。この様に人間に生まれながらにもっている仏の徳が修行によって光りを放つのでありますから一個一個と玉を繰るたびに迷いがなくなつて悟りに近づくのであります。それから母珠には房がついていて、それに小さな玉が十個ありますのは、十波羅密菩薩の徳をあらわし、その端に細長い玉が二個ついています。普通は露とよんでいます。これは福智二嚴といつて、福德と智慧で飾つてあるのです。それから一方の房に極めて小さい玉が一個だけついています。これは釈迦如

来のあとつぎとして将来私達人間界に出現してくださる弥勒菩薩であります。念珠一つにはこの様に添い意義があるのですから、大切に扱つて下さい。

### 「お大師さまのことば」



教法はもと差うことなし  
牛と蛇との飲水のごとし  
牛飲めば蘇乳となり  
蛇飲めば毒剝となる

(五部陀羅尼問答偈讚宗秘論)

教えそのものに違いがあるのではないのです。その真意を正しく使うか、悪く使うかによるものなのです。それはあたかも牛と蛇とが水を飲むようなもので、同じように水を飲んでも牛にとってはその水が人や動物を養う甘美な乳となって出て来ますし、毒蛇にいたっては人や動物を殺傷する毒液となって出てくるのです。でもそれは水の罪ではないのです。その水を飲んだ物の身体のおしくみによつて、一方では乳となり、一方では毒液となつてしまふのです。

これと同じように、法も使い方によつて人

を益するものにもなるし、人を害するものにもなるのですから、なにはともあれ教えを正しく使えば人の心を安らかにするものとなるし誤つて使えば人の心を恐怖におとし入れて苦しめるものにもなるのです。従つて、本人の心掛け一つでどうにでもなるといふことで、十分注意すべきものです。

### 「お経とは」



皆様が親しんでいますお経は、仏さまのお悟りの法門であり、それには宇宙の真理が説いてありますし、人間の道徳や真実の美が仏さまの眼によつて表現されているのでありますから、そこには聖なる功德がこもっているのです。それゆゑに亡き人の成仏も世界平和も様々な人々の幸福も、お経によつて導かれていります。よく「意味の解らないお経をただ棒読みしても一つも有難くない」といふ人に出くわしますが、理屈としては一応うなづけるのですが、それは常日頃お経を読んでない（親しんでない）人の言うことでありまして、毎日お経を読んでいりますと、本当に不思議ですがそんな理屈は頭に浮んでこなくなりませう。

お大師さまは「声字実相義」の中で

「声字は、そのまま実相をあらわす」

という言葉をお示し下さいました。これは、ひと声ひと声をいれ、まごころをこめて誦えますと、自然に雑念が払われて自分の口から出す音声によって身も心も洗い清められ無限の喜びにひたる事が出来るという意味が含まれています。この様に、お経には、一字一字に、千も万もの意味が含まれてありますので、まことに不思議な功德が得られるものなのです。どうぞ心にゆとりをもって親しみ、誦えてみて下さい。そうすればきつと功德があるはずですよ。

## 「生命(いのち)」



お釈迦さまの御誕生にあたっては、古い伝説によりますと、六牙をもった白い象が黄金山の上を歩いていて、マヤー夫人（お釈迦さまのお母さま）の胎内に入るといふ夢を見られて受胎せられ、やがて、月みちて四月八日にルンビニーの花の園で御誕生になられ、生まれるとすぐさま、東西南北の四方に向って七歩づつ歩み、右手は天を、左手は地を指さして「天上天下、唯我独尊」と宣言された事が伝えられています。四方に向って七歩づつ歩まれたという事は、人間世界を含めた迷いの境界は六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）にわかれていますが、この六道

を超えて七歩の迷いなき悟りの境界を説くために、この世に生まれたのがお釈迦さまであるということを示すために七歩あゆまれたと言われているのです。まさか生まれたばかりの赤ちゃんが「天上天下、唯我独尊」と、こんなことを言えるはずがありません。従って、お釈迦さま一人のみが、まことの教え、まことの道をさとり説かれる方であるということを生身にちなんで表現されているものなのです。

しかし、じつは「天の上にも、天の下にも、唯われひとり尊し」ということは、一人の人間の生命は、他のなにもものにもかえがたい、かけがえのない大切なものであり、尊いものなんです。という事をお釈迦さまに託して語っているのです。

本当に人間一人の生命は、地球より重いといますし、親が子を思う心は、はかりしれません。でも現在では、この尊い生命を自分の手で断ち切る心の弱い人が増えてきています。せっかくこの世に人として誕生しながらも自分の生命を自分の手で断ち切るなんて本当に罪深いと思いませんか。どんな事情があるにせよ、この世の中に人として誕生した限りは、その時、その時を精一杯に生きる事が人として誕生した私達の使命なのです。人生というものは必ずしも悪い事ばかり続きませんし、良い事ばかり続きません。昔のことわ

ざに「上り三里、下り三里」とか「上り坂あれば、下り坂あり」という言葉があります。人の一生のうちには運がよくてやることなすこと全てうまくいく時もあるれば、ある時には運が悪くてどうやってみても万事、思うにまかせぬことばかりの時もあります。しかし、運が盛んだからといって有頂天にならず、運が向かないからといって悲観する事もありません。いつの時も熟慮と努力を忘れる事なく精進することが大切なのです。そして生きていくのではなく生かされている生命をいかに使うかが問題ではないでしょうか。



編集後記

皆様方の、考え方や人生論等を記載致したく思いますので、どうぞ申し出て下さい。